更級への旅

芭蕉の「更級姨捨」来訪320年・その7

81

「田毎の日」で迎えた新年

「田毎の日」という言葉があります。松尾芭蕉が元禄二年（一六八九）の元日に詠んだ歳旦吟です。

元日は田毎の日こそ恋しけれ

芭蕉が更科に旅したのは前年の中秋八月十五日（陰暦）。五カ月後の新年の朝日を、当地の「田毎の月」と同じように観賞する気持ちで拝んだのです。パンパンと柏手を打っていたかもしれません。朝日が田毎の月のように田んぼ一枚一枚に映っている光景を想像したかもしれません。実はこの句が、更科での月見が芭蕉文学の到達点「奥の細道」につながる大きな弾みになっていたことをうかがわせる、重要な句です。

▽大事な人には本心

芭蕉が師と仰いでいた平安時代の僧、能因法師や西行が訪ねた東北地方の歌枕の地を中心に歩くのが「奥の細道」。その出発は、この句を作ってから三カ月後の元禄二年三月下旬、江戸からでした。二カ月前の一月下旬には、郷里の三重県伊賀上野の知人、猿雖にこの句を盛り込んだ手紙を次のように送っています―

去年の秋はさらしなの里姨捨山に旅をしました。木曽路を通って人生の危うさを知り、姨捨山で慰めがたい気持ちを体験し、あわれも見尽くしました。しかし、年が明けてもなお旅に出たい心地がしてしょうがありません―芭蕉はこのように振り返った後に、「元日は田毎の日こそ恋しけれ」の句を一句だけ添えています。

続けて、塩竈の桜、松島の月など東北地方の歌枕の地をなんとしても訪ねたいなどと、「奥の細道」の旅の構想を明かしています。

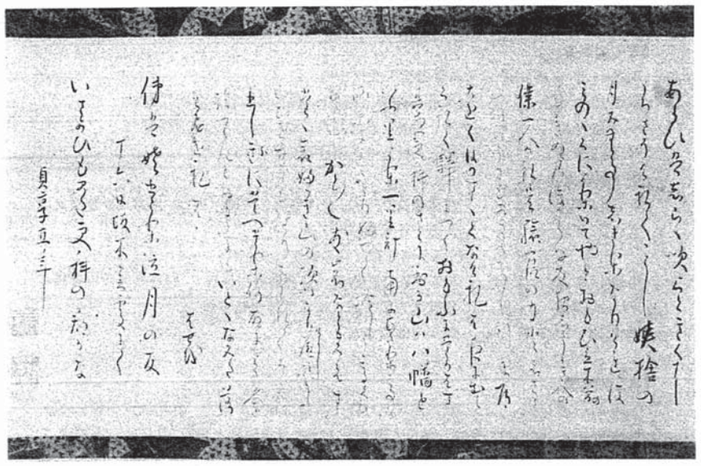
猿雖は広く商いをしていた富豪で、芭蕉の実家に物心の支援をしていたということなので、「迷惑をいろいろ掛けているけど。私はこんなことを目指しています」という芭蕉の近況報告と言えます。新しい年のはじめですから、大事な人には一層自分の本心、目標を明らかにしたと思われます。また、この手紙の構成は、更科への旅をして覚悟が固まった、肉体的には苦しい旅だったが、月の都を体感できて自信が持てたと披露しているようにも受け取れます。

▽帰江後1カ月以内に?

どうして自信が持てたか。それは更科への旅の収穫をある程度、表現し切れたという思いがあったからではないかと思います。芭蕉は更科から江戸に戻った八月末ごろ以降、旅の収穫をさまざまな表現で形に残そうとしました。

その一つが「更科姨捨月之弁」です。俳句とその句にまつわるエピソードなどをつづった文章で構成されていることから、俳文と呼ばれる表現形式です。芭蕉の直筆で掛け軸に表装されたものが二〇〇四年の「第21回さらしな・姨捨観月祭」に合わせ、芭蕉が訪れた長楽寺で公開されました。左の写真は、千曲市教育委員会が作った資料に載っていた写真を複写したものです。

四百字詰め原稿用紙一枚程度の中に、芭蕉は当地に旅してその哀れ深い景色に感動して涙を落とし、「俤や姨ひとりなく月の友」「いざよひもまだ更科の郡かな」という句を得たことを簡潔に示しているのですが、文末をご覧ください。「貞享五年」となっています。貞享五年は一六八八年、この年は九月三十日に元号が変わって「元禄」になるので、江戸に帰ってそう時間がたたないうちに書いたことになります。



またこの時期は、一年で最も空気が澄んで月がはっきり見えるころで、「後の月」と呼ばれる九月十三日の夜の句会では次の句を詠んでいます。

木曽の痩せも
まだなほらぬに後の月

「奥の細道」の旅の構想固まる

体をそうとうこき使ったのです。当時、旅は命がけでする時代でした。体重は減ってしまって体調はまだ、もとには戻らないけど、十三夜の月をみながら、更科の旅の懐かしんでいるようです。

▽「細道」前の草稿

こうしたことばをつむぐ作業をしながら、芭蕉は一方で、「更科紀行」の執筆を進めていたと思われます。未完成の草稿がいくつか伝わっています。

「芭蕉の更科紀行の研究」（赤羽学著）によると、最初の草稿は江戸の門人岱水が、芭蕉が書きなぐった紙を保存しておいたもので、元禄二年の正月以前、つまり、「元日は田毎の日こそ恋しけれ」の句を添えた手紙を猿雖に出す前に書かれた原稿だということです。

これを推敲した次の草稿が、芭蕉の故郷、三重県伊賀上野で一九六七年に発見された直筆のものです。所蔵者の沖森直三郎さんの苗字を取って「沖森本」と呼ばれています。岱水が保存しておいた草稿より巻末の句の数が多いことなどから第二次草稿とされ、奥の細道に出発する前までに書いたとされています。

こうした作業を経て芭蕉はほぼ意を伝えられる文ができたと思い、せいせいとした気分で奥の細道に出発したかもしれません（芭蕉は「奥の細道」の旅の後の元禄四年ごろに最終稿を仕上げたとされ、それが現在、完成稿として通用しています）。

芭蕉直筆の「更科姨捨月之弁」は縦約二十九センチ、横五十六センチの大きさで、現在は神奈川県平塚市の隆盛寺が所蔵しています。同寺の宗派である日蓮宗の学僧、元政上人を芭蕉が連句に詠んだことがある縁からだそうです。さらしな・姨捨観月祭にお越しになったことのある萩原是正住職が千曲市教育委員会の依頼を受け、長楽寺での公開をお引き受けくださったそうです。

上の写真は「元日は田毎の日こそ恋しけれ」の句に画を添えた芭蕉直筆の掛け軸です。東京・神田の古書店、玉英堂書店が所蔵、販売しているそうです。

発行　二〇〇八年 十一月二十四日
編集　さらしな堂
（代表・大谷善邦）
〒三八九-〇八一三
長野県千曲市大字若宮一一八四-六
（旧更級郡更級村）